

# 生文研メール

## 創刊号

平成 16 年 7 月 30 日

Vr.1.0.1

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市伊福町 2-16-9

ナトリウム清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

## 日本人と海藻のかかわり (1)

今田節子

生活文化研究所所員としての初仕事がこの「生文研メール」の執筆となった。生活文化として何を取り上げるか迷った。生活文化として何にできた「海藻の食文化」の調査研究を通して、日本人の食生活文化の一端を紹介してみようと思う。世界的にも希な日本独自の海藻の食文化を若い世代にも知ってもらいたいという願いからである。本稿では、海藻の食文化を理解するために海藻の概要から述べてみたい。

まず、海藻と海草の違いにふれてみよう。海藻 (sea weed, marine algae) は葉、茎、根の区別がはっきりせず花も実もつけない (隠花植物)。これに対し海草 (sea grass) は陸上植物と同様に葉、茎、根の区別が明確で、花をつけ種子を作る (顕花植物)。食用とされてきたのは海藻であり、海草はほとんど食用とされていない。永年の経験を通して性質の違いを体得してきた結果といえよう。

海藻はコンブやワカメなどの褐藻類、テングサやアサクサノリなどの紅藻類、アオノリやアオサ

## はつめり

所長 加藤止春

生活文化研究所はその研究活動のなかで、これまで「生活文化講演会」を開催し、『生活文化研究所年報』を発行するなどして、その活動成果を学内だけでなく一般にも公開してまいりました。このたび、そのような研究所の活動をさらに広く紹介する目的で、「生活文化研究所報」を発行することを企画いたしました。今のところ年に数回の発行を計画しておりますが、ここには最近の研究の様子やメンバーによる連載記事、あるいは研究の短手短脚な紹介や所感などを掲載し、子どもの活動の様子をより身近に知っていただくことを意図しております。皆様のご支援を得て研究所の活動が一層促進しますよう、ご協力をお願いする次第です。

などの緑藻類に分類される。一般に褐藻類は寒海域の漸深帯に、紅藻類は温暖海域の潮間帯に、緑藻類は亞暖海域から暖海域の潮干帯に自生するものが多い。南北に長い地形をもつ日本は全ての海域に面し、多種類の海藻の自生に適した恵まれた環境にある。

日本周辺に自生する海藻は一五〇種類にもおよぶ。現在、実際に家庭で利用されているものはコンブにワカメ、ヒジキ、モズク、ノリなど五、六種類に過ぎず、全体からみれば一握りにも満たない。しかし、筆者が行った西日本を中心とした聞き取り調査や『日本の食生活全集』を資料とした研究によると、自給自足を大原則とした昭和初期頃までの伝統的食生活の中では五〇種類にもおよぶ海藻が利用されていた。

我々の先人達は、多種類の海藻のなかから、どのように食用海藻を選択し、食生活に取り込んできたのか。そのヒントが海や磯などの自然環境、採取方法、そして生業形態と住民のかかわりのなかにみえてくる。

例えば、畑作中心の農業偏重型半農半漁を営んできた瀬戸内沿岸地帯では、海藻採取の主役は古来や主婦、子供達で、干潮時に干潟に出て、遊びや楽しみをかねて海藻採取が行われた。すなわちおかず採り漁業の一環である。この磯採取は干満の差が二、四 m もある瀬戸内海で可能なものであり、海藻の種類も潮干帯に自生するアオサ、ア

オノリ、フノリ、アマノリ、オゴノリ、シラモなどの緑藻類や紅藻類と漸深帯上部に自生するワカメなどが主体であり、家庭料理として使われた。一方、漁業が盛んな山陰沿岸や北近畿沿岸地域では、海藻採取は漁種の一つに組み込まれ、自生量が多く品質のよいワカメやモズクなどは現金収入の対象となり、様々な加工保存法が工夫された。日本海沿岸は干満の差が二〇〜三〇cmと小さいために船上から道具を使って採取する船上採取や潜水採取が行われ、海藻採取は漁種の一つとして位置づけられていった。また、大規模漁業が営まれてきた九州南部沿岸、四国南部沿岸地域の一部では、海藻の種類が多く自生量が多いにも関わらず、意外に海藻に対する関心が薄い地域もみられた。

ルシアン・フェーブルは「生活様式概念」として、「必然性はどこにもなく、可能性は至る所にある。そして人類、可能性の主人がその採否を決める。したがって、大地でも気候の影響でも場所によって異なる諸条件でもなく、当然逆転して、人類が全面に置かれる。」と述べている。各地域で形成されてきた採取・加工保存・調理という一連の海藻の食習慣は、食材料としての海藻の品質のみならず、人間と海、そこに自生する海藻を取り巻く可能性のなから、地域住民の手によって価値観を反映した選択がなされ、生活のなかで繰り返し使われてきた結果である。

〔参考文献〕

日本の食生活全集編集委員会編『日本の食生活全集』全四十八巻、農山漁村文化協会（東京）、一九八四〜一九九二

今田節子著『海藻の食文化』、成山堂書店（東京）、二〇〇三

フェーブル著、田辺裕訳『大地と人類の進化』下巻、岩波書店（東京）、一九七七

### 青い鳥の家族関係学(1)

#### テキストにみる家族 関係学の指向性

加藤止春

一九七二年に出版された家族関係学のテキスト『家族関係入門 青い鳥をみつけるには』の「はしがき」で、著者の大井尚俊（一八九六〜一九八五）は次のように述べる。「人間は誰でも『幸福』を求めて生きている。……幸福をつかまえるには、理想的結婚をするのが一番だと巷の人は云う。立派な相手を見つけて幸福な家庭を営むには、家族関係学を勉強するがよいと常識が教えて呉れる。」（大井一九七二「はしがき」）

中間の省略した部分にメルリンクの『青い鳥』の引用を含んだこの論法は強引で、論理の飛躍の度が過ぎよう。私は、「理想的結婚」が「幸福な家庭」をもたらす可能性について必ずしも否定しないが、その前段の、幸福と理想的結婚を直截に結びつける大井の主張は恣意的であると

思う。そして、理想的な結婚と幸福な家庭の実現に家族関係学の学習が役立つとする後半のその主張もまた、恣意性をもつように思われる。しかし、この点はそうではないのかも知れない。

梅木茂によれば、「家政学の中で家族の人間関係の研究」を行う家族関係学は、「法則性探求の志向性」と「効用性探求の志向性」をもつという。「家族関係学は、現実の家族関係事象を実証的で法則発見的な経験科学の方法を用いて解明するだけでなく、家族成員の自己実現やその福祉を確保する」という、「実践的な目的」をもつのである（梅木一九九六・一九九）。

この実践的な目的のなかに、大井のいう理想的な結婚と幸福な家庭の追求も含まれるように思われる。ただし、「家族成員の自己実現やその福祉の確保」という梅木の固い語彙と、大井のやわらかな表現との間には大きな乖離があるようにみえる。また、梅木が二つの目的をいうのに対し、大井はそのうちの二つのさらにその一部を強調する。「地上に繁茂する多くの植物は年々春に巡り会い花を咲かせるが、人間は個人としては地上で一度より春を迎えることが出来ない。翔び去った青い鳥を探すためには、家族関係学に目を向けるのがよい。科学の眼を通して、多角的に家族関係に就て考究してゆけば、青い鳥をみつけることもあながち不可能ではあるまい。」（大井一九七二「はしがき」）

大井のこのような主張や表現には理由があるように思われる。家政学の一分野としての家族関係学は、多くが女子大学や女子短期大学のカリキュラムのなかで教授されてきた。教える側の年配の大井にとって、受講生である女子学生たちの「地上での一度の春」に、もっともよい「巡り会いと開花」を可能にすることができるかもしれない知識を授けることは、あるいは義務のように思われたかもしれないのである。

この点にはおそらく大井の履歴もかかわっている。テキストに添えられた著者略歴は、大井が大阪高裁の判事や弁護士職をもつことを伝えている(大井一九七二「奥付」)。一般に、裁判所の業務にたずさわる法曹人は、その関与する案件のなかで人間関係の暗い側面を目にすることが多いと思われる。そのような経験を背景にしたとき、受講する若い学生たちに幸福の「青い鳥」を願う気持ちはかえって強まるのではなからうか。それは一種の親心(バターナリズム)である。もちろんそこには思い込みがある。それは、二〇歳前後の女性にとって「立派な相手を見つけて幸福な家庭を営むこと」が最上の選択であるという先入主である。これもまたバターナリズムではあるが、年配の著者のそのような親心は無下には否定できないかもしれない。

ただ、大井のテキストが書かれた一九七二年は沖縄が日本に返還された年である。世情は沖縄返

還をめぐる大きく揺れ動いていた。そのなかで学が女子学生たちが、自らの自己実現の目標として、理想的な結婚と幸福な家庭を求めるばかりであったかどうかは疑問ではある。大井のバターナリズムも、時代の転換のなかで空振りしたかもしれない。

いずれにせよ、家族関係学のもつ実践的な目的を最大限に拡張し、その受講対象の属性に一定の見方を導入するならば、このような主張も可能なのである\*。家族関係学はその学問的営みのなかに、価値中立的な法則性の探求から青い鳥の追求といった現実的価値指向にいたるまでの、多様な幅広い振幅をもつといえよう。以下で私は、女子学生に学ばれることの多かった家族関係学について、彼女らが用いたであろういくつかのテキストの検討を通して、この学問が示す幅と指向性を読み取ることを試みよう(二〇〇四、六、二〇)。(註)

\* 大井のこの著書は、その内容に著者の個性が色濃く表出されているので、家族関係学のテキストとしては使いにくいかなと思ふ。この点は後にふれることにしたい。

〔参考文献〕

大井尚俊 一九七二『家族関係入門 青い鳥をみつ

つけるには』法律文化社

梅木茂 一九九六『家族関係学』比較家族史学会

『事典家族 弘文堂』

## 日本の霊場1 武蔵

東叡山寛永寺(東京都台東区)

小嶋博巳

熊野 高野山 吉野・大峰などを含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録された。しばらくは、聖地や、聖地をめざす巡礼の旅が話題にのぼる機会が増えることだろう。

多神教の日本の巡礼は「×× 力所」という複数の聖地をめぐるもの、一神教の世界のそれはイエルサレムやメッカのような単一の聖地をめざす、という言説は、「巡礼」という語の重層性に気づかないカテゴリー・ミステイクだし、事実認識としても問題がある。しかし、多くの聖地を経めぐる回遊型の旅に日本人が魅力を感じ、そのタイプの巡礼を整備・発展させてきたこと自体は確かである。そしてその前提には、列島の至るところに土地の個性と分かちがたく結びついた神仏が鎮座してきた事実があった。小文では、そうした日本の巡礼聖地を、陸奥から薩摩・大隅に至る六十六の国ごとに一か所ずつ紹介してゆきたいと思う。中世・近世に多くの人がびとが身を投じた六十六部、別名「日本廻国」という巡礼 文字どおり日本全土をめぐる巡礼を、紙の上でやってみようという横着な企てである。

さて、この霊場めぐりを東京は上野の寛永寺から始めるのは、なにも東京が首都だからではなく別に少々の理由がある。そもそも、仮に東京が属

するかつての武蔵の国から始めるにしても、彼の地には霊場や聖地の話によりふさわしい寺社は多々ある。人気という点では、江戸っ子をして「十三番目がこのくらい」と自慢させた浅草寺（坂東三十三万所の第十三番札所になる）が随一であろうし、初詣客数で常に上位に顔を出す平間寺、通称川崎大師も武蔵の霊場である。また、一宮ということなら氷川神社であり、現在はいさいたま市の一部になってしまったが、「大宮」の地名はこの社に由来する。国府にあって国魂の神を祀ってきた府中市の大国魂神社も忘れるわけにはいかない。関東山地に分け入れれば、秩父神社や秩父三十四万所の観音霊場があり、さらには武州御嶽、三峰といった修験の聖地もあった。こうした寺社に比べると寛永寺は、この国を代表する宗教的聖地と言ってよいかどうか躊躇せざるをえない。はたして霊場をめぐる旅の出发点にふさわしいのか。

さきに述べたように、小文は六十六部の廻国のつもりで諸国の霊場について綴ってみようというものである。じつは江戸時代の廻国には、東叡山寛永寺をもって開白（お遍路さんなら「打ち始め」、オリエンテeringなら第一チェックポイント？）とするという一種のルールがあったらしいのである。「らしい」としか言えないのは、いまだ明示的な史料が見つかっていないからであるが、江戸時代中後期の納経帳（各霊場で納経請取

を書き込んでもらう帳面、これもオリエンテリングの比喩でいうならチェックカードか）をみると、東叡山の請取から始まっている例はじつに多い。しかも、本当に寛永寺から旅を始めたもののほかに、実際の旅の経路や参詣の順を無視して、帳面の操作によって寛永寺を巻頭にもつてきている例がしばしば見られるのである。私自身が実見した納経帳は、大半がその様式であった。その理由についてはいまだ十分納得のゆく説明が与えられないのだが、ここでもとにかくそのルールに従ってみようということなのである。

前置きが長くなった。さて、現在の寛永寺は上野公園の北、東京芸術大学音楽学部に接して寺地を構える寺である。山手線の鶯谷駅とのあいだに墓石の林立する霊園をもち、また上野駅に至る途中には子院が甍を連ねる一角があるとはいえず、広大な境内に壮麗な伽藍が立ち並ぶとか、あるいは参詣の善男善女が引きも切らず訪れる、といった趣の寺ではない。しかし、これはもとより本来の姿とは異なる。江戸時代の寺域は上野の山の南部一帯、つまり現在の上野公園全体に及ぶ約三〇万坪を誇り、上野動物園、東京国立博物館をはじめとする博物館・美術館群、東京文化会館、国際子ども図書館（旧帝国図書館）、東京芸大等々の施設がいずれもそのなかに含まれてしまう広大なものであった。したがって、いまは動物園敷地内にある五重塔、東照宮、不忍池の弁天堂、その東

の清水観音堂、国立科学博物館北側の両大師等々も、往時は寛永寺境内の一点景に過ぎなかった（不忍池は正確には直轄末寺の寺地になる）。本坊の円頓院は現在の東京国立博物館の場所に位置し、その南、国立科学博物館や東京都美術館に囲まれた噴水池のところに、床面積六〇〇坪弱という巨大な根本中堂（本堂）がそびえていた。

寺の歴史は、元和八年（一六二二）、二代將軍秀忠が上野台地の約半分を、家康の帰依篤かった天台僧・天海に与えたことに始まる。天海はここに、平安京における比叡山に相当する江戸城の鬼門の鎮守として一寺を創建、東の比叡山の意で東叡山と号した。本坊が完成したのは三代家光の寛永二年（一六二五）、のちに勅許を得てこの創建時の年号を寺号としたのも、比叡山延暦寺に倣ったものである。ちなみに、比叡山を模す手法は徹底しており、根本中堂・常行堂・法華堂といった一山の中核をなす伽藍の模倣はもとより、京都の清水観音や祇園社が境内に勧請され、琵琶湖に見立てた不忍池の中島には竹生島の弁才天が祀られた。

このことからわかるように寛永寺は、延暦寺が王城と朝廷に対して負ったのと相同の役割を江戸城と將軍家に対して担う祈禱寺だったのである。「江城の鬼門を守る霊場として天下泰平の御祈願所也」（桜銭書）。千ヶ寺参詣名勝記（文政十一年（一八一八））などという表現は、その役割を

端的に表していよう。今日広く認識されている、芝の増上寺とならぶ徳川家の菩提寺という性格はのちに、天海に深く傾倒した家光が自らの葬儀を寛永寺におこなわせ、さらに四代家綱、五代綱吉の遺体が同寺に埋葬されるに至って付加されたものである。十七世紀半ば以降は門主には皇族が迎えられ、輪王寺宮を称して日光・東叡の両山を管し、かつ天台座主をも兼ねた。寛永寺は、江戸時代を通じて、比叡山に代わって実質的に天台宗の総本山の役割をも果たしたのである。

「上野の花見」のように民衆の行楽とも無縁ではなかったが、寛永寺の本質はいかめしい官寺の相貌にあった。日本廻国といつ、ある種のナンヨナリズムと結びついた巡礼がここを出発点としたのも、制度的かつ思想的に相応の理由があったとみるべきである。そしてまた、維新の際に彰義隊がここに拠って官軍と上野戦争を戦ったのも、その結果、一山ほとんど灰燼に帰し、以後はそのありようを大きく変えることになったのも、すべて江戸時代にこの寺が担った役割に理由がある。上野戦争の痕跡は、JRをまたぐ両大師橋の西の黒門（旧本坊表門）に、多数の弾痕として遺っている。

〔寛永寺〕  
所在地 台東区上野桜木一丁目一四の十一  
交通 JR・鶯谷駅より、徒歩二分



寛永寺を冒頭におく納経帳（宮城県桃生町・個人蔵）

体験的生活文化史 昭和編 その一

新田義之

私は昭和八年（一九三三）の生まれである。私の体験的文化史はこの年から始まるわけだが、生れて直ぐに何を体験したのかは、もう記憶にない。記憶が割合にしっかりした形をとり始めるのは、恐らく小学校に入る頃からである。

私は昭和十五年四月に、石川県河北郡笠谷村立「笠井小学校」に入学した。一年から六年までの「尋常小学校」で、その上の高等小学校あるいは「高等科」と呼ばれた二年間の課程は、この学校

には付設されていなかった。村には小学校が三つあったが、高等科を備えた小学校は一つだけだった。義務教育年限は六年で、尋常小学校を卒業すれば、その上の学校には、希望した者以外は行かなくてもよかった。

日本に近代的な学校制度が生れたのは明治五年で、翌年から小学校が各地に設けられ、社会階層の違いを問わず誰でも入学できるようにになった。当初は下等小学四年、上等小学四年の計八年を小学校課程とした。その上に中学と大学を接続させるつもりだったのである。しかしこの構想は実施後しばらくして破綻し、初等科三年、中等科三年、高等科二年とされたり、尋常小学校四年、高等小学校一丁四年になったり、いろいろな形に揺れながら変化したが、私が入学した頃は今述べたようになつていたのである。

尋常科六年を卒業し、更に上に進みたい者には高等科二年を経て師範学校や女子師範学校などを受験する道や、高等科を経ないで直接に中等学校（中学校、女学校、商業学校、工業学校など）に進学する方法などが準備されていた。その上には高等学校から大学に繋がってゆく系統や、師範学校から高等師範学校に進む系統など、幾つかの可能性が交差した形で設けられていたが、細かいことは省略する。

さて、私が小学校に入った年は昭和十五年、つまり西暦一九四〇年である。しかし当時の日本は

西暦を用いていなかった。明治五年（一八七二）に、日本の紀元、つまり日本における歴史上の年数を数える基準を、日本書紀に記された神武天皇即位の年にすると決められてから、その年を皇紀元年として起算する「皇紀」が採用されていた。そして西暦紀元前六六〇年を神武天皇即位の年と判断し、西暦年数に六六〇を加えた数が皇紀年数であるとしたのである。すなわち、昭和十五年（一九四〇）は皇紀二六〇〇年にあたる。

日本の紀元を日本書紀の記述によって西暦紀元前六六〇年とするのは、必ずしも科学的ではない。なぜなら、書紀の巻三から突然に使われ始める干支（十干十二支の組み合わせで特定の年を示す。例えば神武天皇元年は辛酉である）という年代記述法では、干支の組み合わせは六十年で一巡するから、もし神武元年が辛酉であったとしても、どの辛酉にあたるのかを特定するのが困難だからである。また天皇の崩御されたときの年齢も、書紀の記述をそのまま信じるのが出来ない場合が多い。大体当時の一年と現在の一年とが同じ日数であったと思う方がおかしい。つまり神武天皇が一七歳で亡くなられたといつても、当時の一年がもし三六五日でなくその半分だったとしたら、今なら六三歳で亡くなられたということになる。

しかしそうだからと言って、皇紀の代わりに西暦を用いる方が正しいと主張するのも、根拠が薄弱である。なぜなら先ず、西暦はキリストの誕生

を紀元とするとされているが、ナザレのイエスが誕生したのが一体何年のことだったのかは、未だはっきりとは分かっていないし、何故キリストの誕生年を日本人あるいは日本国の紀元とするのかその理由もそれほど明らかなものではないからである。私たちとしてはキリスト教を基盤とした西暦でも、イスラム教の世界で用いられているヒジュラ暦（教祖ムハマドがメッカ市から逃れてメディナに移った年を元年とする）でも、東南アジアで用いられている仏滅紀元（釈迦が亡くなった年を元年とする）でも、日本の歴史との縁の遠さにおいてそれほど違いはない。しかし皇紀の論理的弱点は幕末まで用いられてきた太陰暦を太陽暦に換えて、一年を十一月三六五日、三六六日にする西洋の暦法を採用しながら、紀元の年数だけを古くした点にある。イスラム世界のヒジュラ暦では一年が三五四、三五五日だから、イスラム世界の一〇〇年は西暦世界の九七年になる。こんなに食い違つと、物の考え方にも大きく影響するだろうから、文化を西洋から吸収しようとした明治政府が、国の古さを強調しながら西暦と同じ年数の数え方を取り入れて皇紀を決めたのは、大変巧妙なやりかただったとも言えるだろう。しかしこの妙案も第二次世界大戦の後までは通用せず、昭和二十年以降は西暦と年号を併記、ないしは時と場合によって使い分ける方法が一般的となった。年号（明治、大正、昭和、平成など）にまつわる

諸問題については、いつかまた改めて述べることにしよう。

さて話しをもとに戻すと、私が小学生になったのは、実に皇紀二六〇〇年であった。このおめでたい年にあつたこの国家的祝祭ムードは、実に大変なものであつた。もちろんそこには長い歴史を持つ国民の誇りと愛国心を高める目的が込められていた上に、日本の国力を世界に宣伝する意図もあつた。日本はこの年にドイツ及びイタリアといわゆる三国同盟を結び、すでに三年前から始めていた中国との戦いを拡大して、いよいよイギリスとアメリカを相手に大戦争を始めようとしていた。私の小学生時代は、第二次世界大戦あるいは太平洋戦争、時には日米戦争とも呼ばれるこの非常に悲惨な大戦争の勃発する前年に始まり、日本の惨憺たる敗戦の次の年で終わるのである。

### 索引の楽しみ 西鶴研究をこぼればなし

広嶋 進

このほど『新編西鶴全集』索引編・第四巻が出版された（勉誠出版、平成一六年二月刊）。私はこのシリーズの第三巻と第四巻の出梓に関わつたが、今回の出版によって井原西鶴（一六四二～九三）の浮世草子全作品の自立語索引（全四巻）がやっと完備することとなった。実は今まで『定本西鶴全集』（中央公論社、昭和二十四年～五十年刊）全十五巻があつたのだが、本文の翻刻のみで

索引はなかったの、これは画期的な出版と言える。完成したら調べてみたいと思っていたことがいくつかあったので、さっそく索引のページを繰ってみた。

確認したかったことの第一は、西鶴が「悪所」という語をどういう意味で使っているかということである。たとえば『日本国語大辞典』(第二版)小学館、平成十二年刊)には、「あくしょ」「悪所」…江戸時代、遊里や芝居町をさしている」とある。また有名な広末保氏の『新編悪場所の発想』(ちくま学芸文庫、平成一四年刊)にも、「悪場所といえば、芝居と廓ということになる。(悪場所論おぼえがき、昭和四五年)」と書かれている。また、『岩波日本史辞典』(平成十一年刊)にも、「悪所あくしょ、悪場所とも。江戸時代、遊廓や芝居町などをさしている。(略)様々な都市文化が創造された場でもあった。」とあり、江戸時代の「都市文化」が形成されたトポスであったとされている。

しかし、守屋毅氏はこれらのごとに疑問を呈していた。「元禄期の「悪所」は、まだ、芝居と遊里をふくむ概念にはなっていないからなのである。芝居と遊里を、「大悪所」とよぶことがあるが、それはかならずしも当初からの用法ではなかった(『元禄文化 遊芸・悪所・芝居』弘文堂、昭和六十二年刊)」。氏は続けて、「用例を充分においきっているわけではないので、いきおい慎重に

ならざるをえない」としていた。

さて、『新編西鶴全集』索引編全四巻を利用して「用例を充分に」見てみると、西鶴浮世草子23作品中には、「悪所」の用例26例、「悪所銀」8例、「悪所狂ひ」4例、「悪所づかひ」4例、「悪所宿」2例、「悪所船」2例、「悪所通ひ」1例、「悪所咄」1例、「悪所落」1例があることが分かった。そして、「彼誓紙を取出し、悪所ぐるいにも(『諸艶大鑑』巻一の二)」というように、48の用例の全ては「悪所」遊里の意味であった。これによって、少なくとも西鶴時代は、「悪所」という語は「遊里」の意味でしか使われていなかったことが判明した。

守屋氏によれば、江戸時代後期の随筆『寛天見聞記』には「芝居町」と「吉原町」をさして、世に悪場所とす」とあるという。この書は寛政より天保期の風俗に関する随筆であるが、また鳥越文蔵氏によれば、天明二年(一七八二)刊洒落本『歌舞伎の華』が「芝居」悪所」とする初出だといふ(江本裕氏解説「遊里と芝居」『西鶴事典』おつふう、平成八年刊による)。

とすると、十七世紀の西鶴時代から一八世紀の天明期にかけて、「悪所」遊里」が、なぜ「悪所」遊里と芝居」へと拡大していったのだろうか。その価値観の変容の背景には一体何があったのであるのか。謎は一つ解けたのだが、また別の謎が生じることになってしまった。

## 不思議な出会い(1)

横山 學

大学院の学生の頃、アルバイトの行き帰りに渋谷の公園坂を通っていた。あるとき突然空き地ができて、そこにテント張りの「骨董市」が立つた。京都の東寺で開かれる「骨董市」が、トラック二台で出張ってきたのだ。ロープに吊るされた裸電球の下に、美術品めいたものから雑貨まで、様々な品が溢れるように並んでいた。「ガラクタ」の山に端から目を通していった。紙類は一点ずつビニール袋に入れて積み上げてある。古文書や葉書、切手やチラシと見ていくうちに、一枚の古地図が目にとまった。広げてみると中版の彩色地図で、木版刷り。綺麗な地図だ。左に中国大陸右に朝鮮・日本・琉球・台湾が描かれている。台湾の下、現在の高雄あたりの島名が「小琉球」とあって、ハツとした。台湾北部の基隆港付近の小島が「小琉球」と称されていた事は知っていた。「小琉球」の文字に惹かれてこの地図を買った。新書本程度の安価であった。他にも図版を二種類買い求めた。江戸時代の読み本の人物を描いた派手な表紙で、団扇に貼り付けて使ったものだ。そしてこの地図のことは、長い間忘れていた。

本学に赴任して間もなく、殺風景な壁に何か飾ろうと資料の山を探していると、調査ノートの間からこの地図が出てきた。なんだか懐かしかった。大学院生の頃のわたしは文字通りの「琉球バ



力」で、「琉球」「沖縄」「南島」と名のついたものは何でも気になっていた。研究会があると聞くのと招かれなくとも顔を出した。テレビ番組や映画の題名にこれらの文字があれば、何でも観て回った。古書店の棚を眺めていると、これらの文字がひととき大きく目に飛び込んでくるようになった。

研究の何かも理解できないまま、関心のある事柄をひたすら追いかけていたのだ。久しぶりに広げてみると、この地図には強く惹きつけられるものがあった。綺麗な線で細かく描きこまれた島々はくつきりと立体的で、バランスが素晴らしい。さっそく表町の専門店を求めるところにした。店員の「綺麗な地図ですね」という言葉に「そうですねですよ」と答えながら、改めて内容を確認した。表題には「唐土名所之絵」、作者は「画狂老人正齡八十」とあった。それでもその時は気がつかなかった。

ある日、渋谷原宿の大田記念美術館へ北斎展を見に出かけた。そこで初めてポスターを目にした。そっくりだ。見慣れた地図が大きく印刷されているのだ。一瞬何のことかわからなかった。はやる心を抑えて会場に入ると、確かに我が家の地図と同じものが展示されていた。その地図は、エール大学東洋図書館の所蔵で、地図の袋紙も揃っている。北斎は画家の傍ら売薬も商っていたように、薬の広告が裏面に刷り込まれている。何よりも、初刷りに近く、線の輪郭が明瞭で、木版の仕

上がりの美しさが際立っている。かつて私が、この美術館と同じ町で偶然に出会った地図は、折り目に少しの裂け目と、僅かな刷りずれ、経年による退色はあるが、まさしく葛飾北斎の晩年の作品であったのだ。

北斎がこの大判錦絵を描いたのは天保十一年（一八四〇）。どんな地図を参考にしたのかはわからないが、それには台湾付近に「小琉球」の地名があったのだろう。台湾の周りの小島が「小琉球」とよばれていたとすれば、「大琉球」もしくは「琉球」は台湾を示すのか。現代の沖縄へと続く「琉球」との関係はどうなるのだろうか。明治の初めに、中国の正史『隋書』の地理篇に記された「流求」が「琉球」か、否かについて、長期にわたる議論があった。この「流求」には「食人」の習俗があると記されている。西欧列国に肩を並べようとする近代日本にとって、この「流求」が沖縄県（琉球国）であることは不都合だったのだ。いま私は「小琉球」を次のように理解している。台湾も琉球も区別無く、中国によって「流求」と称された時期があつて、その近辺の小島が「小琉球」だったのだ。「小琉球」という文字にも胸の躍った頃の、懐かしい出会いの話だ。

#### 生活文化研究所「演習室」の利用について

演習室の利用の際には、以下のことを守ってください。

- 一、利用者は、利用者カードに必要事項を記入してください(授業時間以外で部屋を利用する場合)。
- 二、図書の利用は、室内に限ります。
- 三、パソコンの利用は自由ですが、設定は変更しないでください。
- 四、ゴミは各自で処分してください。
- 五、私物は、各自で管理してください。

#### 編集後記

「生文研メール」の創刊には、様々な期待が込められています。研究所の活動や構成員の研究を広く知って頂くことは、定期的な年報の刊行によって図られています。しかし、学術論文という構えの形ではなく、いわば「語りかける」ような柔軟さで、日頃の研究の紹介や、調査の経緯談や、新しい視点を、学生諸君に伝えたいと願っています。どこかで返信を期待する気持ちもあり、「メール」というネーミングが選ばれました。(Y)